



図119 巻館跡の碑 館跡の大半は市街地になっている



図118 館跡の位置
5万分1地形図「弥彦」

巻館跡 西蒲区巻

巻館跡は、巻の市街地の北西端の自然堤防上にある。現在は宅地や道路になっている。

発掘調査が行われていないため、館の実態については不明な点が多い。明治時代の地籍図などから東西約一六〇メートル、南北約一三五メートルの大規模な方形の館であったと推定され、周囲には幅一二メートル前後の堀や土塁が巡っていたと考えられている。館跡からは十五世紀代の珠洲焼の壺や、中世の土師器皿（かわらけ）が採集されている。

巻館の起源は不明であるが、天正十二（一五八四）年に三条城主の甘糟長重が上杉景勝の側近にあてた書状に、「真木之地之事」と記されており、これ以前に遡ることが分かる。この書状には、「真木之地」が天神山城（七八ページ）を本拠地とする小国氏の家中の者によって守られていたことも記されている。また、寛政元（一七八九）年の「御巡見様御案内手控帳」によれば、天神山城主小国家の家臣であった西山庄左衛門が、



図120 明治20年代後半の地籍図と推定範囲

かつて城主として居住していたことが記されている。その後、慶長三（一五九八）年、上杉氏が会津に移封（領地換え）され、家臣たちも一緒に会津へ行き、巻館は廃止されたと考えられている。

慶長五年の「巻村内検地帳」には、「にしくるわ」「にし城之まへ」「城ノまへ」「にしほり」「土るいの上」など城館に関する地名が記されている。また、「町ノ城之前」「しろまわり」「よこ町」「にし町ノ後」「町ノ下」などの地名も記されている。規模は不明だが、館に接して町場が形成されていたようである。

巻館跡は昭和四十（一九六五）年に巻町の史跡に指定され、新潟市の史跡に継承されている。